

クローチェとジェンティーレの知的交流に関する小話

中川 政 樹

はじめに

ここに紹介するのは、20世紀前半にイタリアで理想主義哲学と呼ばれる強固な観念論の体系を築き上げ、知的・文化的世界に一種の覚醒を引き起こしたベネデット・クローチェ(Benedetto Croce, 1866~1952)とジョヴァンニ・ジェンティーレ(Giovanni Gentile, 1875~1943)の関係に関する一つのエピソードである。

周知のように、両者は、共同して理論活動に勤しみ、相互の知的・理論的交流によって、クローチェは精神哲学(Filosofia dello spirito)を、ジェンティーレは行為主義(Attualismo)⁽¹⁾というそれぞれの哲学理論を完成させた。そのことによって、彼らは「観念論の再生と凋落」(Rinascita e tramonto dell'idealismo)⁽²⁾の時代の主人公として、文化の多方面に絶大な影響力を及ぼしたのであった。

彼らの思想的共同作業は、けっして一枚岩のものではなく、その当初から意見の相違や理論的対立を相互批判によって克服しながら、それぞれの理論体系を構築したのであったが、その過程で、意見の相違や理論的対立がもはや解消できないまでに深化し、当時の政治情勢の中で最終的には政治的な敵対関係にまで至ったのであった。

このような過程を略述すれば、おおよそ三つの時期に分けることができる。第一の時期は、両者の交流が始まった1896年から、相互批評を通じて知的共同作業が行われた1912年頃までの期間である。この時期に、両者は理論的相違を抱えながらも、書簡の交換や活発な討論を通じてお互いの思想形成を行った。特にクローチェが1903年に発刊した『ラ・クリティカ』《La Critica》誌⁽³⁾において、両者は共同編集者・執筆者として、それぞれの得意とする分野、すなわち、クローチェが主に文芸評論・歴史の分野

で、ジェンティーレが哲学・教育の分野で、筆を振るい論陣を張った。しかし、この時期の終盤に、ジェンティーレが行為主義の構想を明らかにしたことによって、両者の理論的相違は決定的になっていった。

第二の時期は、両者の論争が始まり、その理論的・思想的対立が公開の場に引き出された1913年から、ジェンティーレがファシズム体制への傾斜を強めた1924年頃までの期間である。1913年11月、クローチェは、彼らの主宰する『ラ・クリティカ』誌にではなく、プレッゾリーニが発刊した『ラ・ヴォーチェ』《La Voce》誌に、「行為的観念論について」(Intorno all'idealismo attuale.)と題するジェンティーレへの公開書簡を発表した⁽⁴⁾。その中で、彼は「パレルモ哲学図書館の私の親愛なる友人たちよ・・・君たちの行為的観念論は、私を納得させるものではない。・・・君たちは、神秘主義(misticismo)である」と非難したのである⁽⁵⁾。これによって、両者の理論的・思想的対立は修復し難いまでに高まっていることが、世に明らかとなったのであった。

最後の第三の時期は、ジェンティーレが起草した『ファシスト知識人宣言』とそれに対抗してクローチェが反ファシズムの学者・知識人を糾合して『反ファシスト知識人宣言』を発表した1925年から、暗殺によってジェンティーレが死去した1944年までの期間である。ジェンティーレは、自らファシスト党に加入し、ファシズム文化運動の中枢を担った。彼は親ファシズム知識人の代表的人物として、ファシスト大評議会の評議員、ファシスト文化研究所長を務め、ムッソリーニの肝煎りで編纂された百科事典においてファシズム理論の体系化に中心的役割を果たしたのであった。それに対して、クローチェは、『反ファシスト知識人宣言』によって、当初のファシズムに対する是々非々の態度を変え、

反ファシズムの立場を鮮明にした⁽⁶⁾。両者は、親ファシズムと反ファシズムという相対立する政治的陣営に属して、対峙する関係になったのである。

クローチェとジェンティーレの対立は、政治的側面から見れば、外見的には前者の勝利に終わったかのように思われる。クローチェは、ファシズムに対して自由の灯火を掲げ続けた知識人として、戦後世界にあらためてその名を印象付けた。逆に、ファシズム否定の知的雰囲気覆われた戦後イタリアの思想界では、ジェンティーレの思想はほとんど無視された状況にあった。この時期にイタリア哲学・思想史を論じた書物で、ジェンティーレに割かれた紙幅はクローチェのそれとは比べるべくも無かったのである⁽⁷⁾。

しかし、イタリア理想主義の思想を語る時、ことはさほど単純ではない。「精神哲学」と「行為主義」の間に存する理論的違いを超えて、イタリア理想主義は彼らの共同制作によるものであった。クローチェとジェンティーレは、それぞれの理論体系を相互批評・批判によって、修正を重ねることによって構築したのであり、その意味で両者は相互に補完的競争者であったと言ってもよいであろう。すなわち、クローチェの「精神哲学」は、ジェンティーレの批評を克服することによって補強されたのであり、逆に、ジェンティーレの「行為主義」は、「精神哲学」を超克する意思なしには、ありえなかったのである。

そのことを端的に指摘したのは、ジェンティーレの弟子でジェンティーレ学派の著名な理論家スピーリト (Ugo Spirito) である。彼は、ジェンティーレの死後5年を経た1949年11月、クローチェに宛てた公開書簡を発表した⁽⁸⁾。スピーリトは、ジェンティーレの行為主義理論の再検討を行うためには、ジェンティーレとクローチェの知的関係の解明が不可欠であると考え、この公開書簡の中で、過去に両者が交わした手紙を書簡集として出版することへの同意をクローチェに求めた。そして、この書簡の中で、ジェンティーレがクローチェに与えた哲学的影響が大であったのではないかと、という問題を提起したのである。

その後、両者の書簡集はそれぞれ出版された

が、今、1896年から1924年までの期間に、ジェンティーレがクローチェに宛てた1013通を収めた『ベネデット・クローチェ書簡集』《*Lettere a Benedetto Croce*》⁽⁹⁾と、クローチェがジェンティーレに書き送った989通を収めた『ジョヴァンニ・ジェンティーレ書簡集』《*Lettere a Giovanni Gentile*》⁽¹⁰⁾を手にとってみると、両者が交わした理論的批判・反批判がそれぞれの理論構築に大きな影響を与えていたことが分かる。とりわけ、哲学者ジェンティーレが、歴史家クローチェに与えた影響とイタリア理想主義への理論的貢献は、これまで理解されていたよりも思いのほか大きなものであったように思われる。

筆者の関心は、両者の全体的な「思想的闘争」の解明にあるが、この小論は、この問題を取り扱うための予備的作業として、前述のスピーリトの公開書簡が指摘したクローチェの初期の理論形成に、ジェンティーレがどのように関与したのか、ということに焦点を当てて、両者の相互関係を紹介するものである。

(1) 我が国のジェンティーレ研究では、これまで彼の哲学を称する伊語、《*attualismo*》あるいは《*idealismo attuale*》に、「行為主義」(ファシズム研究会編『戦士の革命・生産者の国家』、太陽書房、1985年)、「行為的観念論」(ノルベルト・ポッピオ著、馬場康雄・押場靖志訳『イタリア・イデオロギー』、未来社、1993年)、「行為主義的観念論」(北原敦『イタリア現代史研究』、岩波書店、2002年)というように、多くの場合、「行為主義」あるいは「行為的観念論」という訳語が与えられてきた。筆者は、これらの訳語が伊語と日本語の間の単なる単語の置き換えにとどまっており、ジェンティーレの観念論哲学において意図された意味を的確に表現するものになっていないのではないかと疑問を抱いてきた。そこで、彼の理論内容によりふさわしいと考えた「活動主義」あるいは「活動的観念論」という用語の使用を試みたことがあった。しかし、これらの用語も彼の思考を的確に表現するものと言えず、ジェンティーレ研究の一層の深化は、明確な訳語の発見なしには果たされないと考えていた。

2006年4月22日に開催された「イタリア近現代史研究会4月例会」で、中村勝己会員による「1930年代イタリアにおけるヘーゲル『法』哲学の再審—

ジェンティーレ、グラムシ、ソラーリー」と題する報告がなされた。この報告の中で、中村氏も、「*idealismo attuale*》、《*attualismo*》をそれぞれ「行為的観念論」、「行為主義」と表現された。筆者は先のような課題を抱えていたため、この点について質問をした。中村氏は、従来からの訳語に従ったが「《現在の観念論》《現在主義》も考えられるのではないかと回答された。その後、「イタリア近現代史研究会会報（2006年5月）〈報告を終えて〉」において、この点について、氏は《*attuale*》を「行為」と「現在」の両義性において把握することが必要ではないか、と述べている。

筆者は、「《現在の観念論》《現在主義》も考えられるのではないかと、「《*attuale*》を『行為』と『現在』の両義性において把握することが必要ではないか」という中村氏の問題提起に異論はなく、おおいに共感を覚えるものであるが、《*atto*》、《*attuale*》、《*attualismo*》について、なおジェンティーレの意図した意味内容をよりの確な日本語に表記する必要があると感じている。それがなされたとき、初めて我が国のジェンティーレ研究は彼の哲学を十全に理解することができたと言えるのではないかと考える。

- (2) E. Garin, *Storia della filosofia italiana*. Vol.3. Torino, 1966, p.1330.
- (3) 『ラ・クリティカ』は、文芸、歴史、哲学に関する雑誌として、1903年から1943年まで、刊行された。また1945年から1951年の間は、*Quaderni della Critica*. という雑誌名で刊行された。
- (4) Intorno all' *idealismo attuale*. I. *Misticismo ed idealismo*. II. *L' errore e il male in quanto realtà* (ne *La Voce*), V. 1913, 13 novembre, pp.1195 - 97.) rist. in *Conversazioni critiche*, II.
- (5) *Ibid.*
- (6) このことについては、わが国では次の詳細な研究がある。北原敦、前掲書、17 - 87頁。
- (7) M. Ciardo, *Un fallito tentativo di riforma dello hegelismo*, Bari, 1948, p.vii.
- (8) U. Spirito, Lettera aperta a Benedetto Croce. in *Giornale critico della filosofia italiana*, 1950, fasc. I. ora in U. Spirito, *Giovanni Gentile*, Firenze, 1969. pp.76 - 93.
- (9) Giovanni Gentile(a cura di Simona Gian - ntoni), *Lettere a Benedetto Croce*. Vol.1 - 5, Firenze, 1973 - 2006.

(10) Benedetto Croce(a cura di Alda Croce), *Lettere a Giovanni Gentile (1886 - 1924)*, Milano,1981.

1. スピーリトの公開書簡について

我々は、まず前述のスピーリトの問題提起がどのような内容のものであったかを明らかにして、論を進めることにしよう。

スピーリトは、次のように述べている。ジェンティーレの没後、ほとんど議論されることのない「行為主義理論の新たな批判的再検討」を行うには、理想主義思想の形成過程におけるクローチェとジェンティーレの相互関係を明らかにすることが必要である。それは、「体系の形成やその段階的な完成の過程で迎ったさまざまな行程を歴史的に再構築」することによって、可能になるのであって、この目的を遂行するための基礎となる問題は、「ジェンティーレ—クローチェ関係の解明」である⁽¹⁾。

しかし、「その研究は、(少なくとも部分的に、場合によっては大部分が) およそ半世紀にわたって強化されてきたいくつかの誤解や予断的外れのものとなっている。それらの誤解や予断は、一にジェンティーレ—クローチェの関係を、年代的な事実の順に、逆にクローチェ—ジェンティーレの関係として定立させているところにある」⁽²⁾。すなわち、両者はともに協力して問題に取り組んだが、9歳年長であったクローチェがより早くその成果を世に表わしたことから、クローチェを主役とし、ジェンティーレを脇役とする「誤解や予断」が横行し、事実が歪められている⁽³⁾。

そして、スピーリトは、クローチェに次のように問いかける。「ジェンティーレ—クローチェの歴史的な関係は、本当はどうか。上院議員殿、あなたはそれをよく知っているし、あなたの著書の中に散見されるさまざまな付随的な証言の中で、数々のやり方でそれを示している。ジェンティーレの思想は、遠い1896年以降あなたに決定的な影響を及ぼした。当時、21歳で、まだ大学生であったジェンティーレは、あなたの中に後の世紀初頭にやっとその効果を発揮した最初の哲学的関心と呼び起こし始めた。この影響は、美学や史的唯物論から始まって、あな

たの研究のあらゆる分野に及んでいった。⁽⁴⁾さらに、「美学や史的唯物論に関する研究から、あなたの哲学体系すなわち精神哲学全般の考察に移ると、議論はさらに明確になり、ジェンティーレークローチェ関係の核心に達する」⁽⁵⁾。

「あなたの思想の発展は、行為的観念論—そこから十分に摂取した後、数 10 年間不当にも嘲笑してきた行為的観念論—の要求の絶え間ない圧力の下で、古い精神主義の残滓を徐々に除去していったことを考慮しないでは、決して理解できないであろう。⁽⁶⁾」「あなたの著作を注意深く研究するならば、行為的観念論に照らし合わせて最初の体系の形状を漸進的に否定してきたことに気付くであろう。⁽⁷⁾」

スピーリトは、もう一步踏み込んで、ジェンティーレーこそクローチェの師であると断じた。「散在する文章の単純な比較と、さらにあなたの思想とジェンティーレーのその発展を注意深く研究することから、引き出される結論は、直接的な系統の必然的な関係があなたをジェンティーレーに結び付けている。あなたはジェンティーレーの最初の弟子であり、後に今世紀の 20 年代から盛りとなる学派を開いたのだ。⁽⁸⁾」

「あなたは、行為的観念論の中で次第に自己を見つけ出すことになった。実際のジェンティーレークローチェ関係の歴史的認識にあるこれと反対の予断の継続と訂正の遅れをどのように説明するか。その理由は、さまざまであるが、・ ・ ・年齢の相違、非哲学的文化領域においてクローチェが先に有名であったこと、とくに広大な文芸評論の分野で『ラ・クリティカ』の最初の成功、・ ・ ・ジェンティーレーの体系的著作が世に現れたのが遅かったこと、いったん公認され受け入れられた評価や判定を覆すことの困難さ、を思い起こせば十分であろう。しかし、これらの理由以外に、より重大で基本的なものがある。すなわち、あなたとジェンティーレーの態度である。⁽⁹⁾」こうして、クローチェの理論形成への自らの貢献をあえて主張しなかったジェンティーレーと、その貢献を認め謝意を示さなかったクローチェの態度の違いを指摘したのである。

クローチェは「ヘーゲルや美学について、ジェンティーレーへの言及していない。逆に、友との長時間の議論やその結果を強調する多くの手紙の中で、この恩義への感謝の告白やトーンは

なんと異なっていることか！それらを、半世紀近く後の今日再び読むと、強い感動と大いなる驚きを覚えないではいられない。⁽¹⁰⁾」「それは、覆い隠すものがない、特に、虚栄の影のない友情にあふれた別のクローチェをそこに見出す驚きである。支援、助け、導きを必要とし、そして、このすべてが限らない愛情と信頼のアクセント全体の中で、欠くことなく繰り返されるクローチェ。理性的に開かれた心で聞き、理解するクローチェ。本当に議論しようとすることなく、教示しそして叱責する、我々が広く知っているクローチェの対極にいるクローチェ。それは、よき、より偉大なクローチェの発見である。⁽¹¹⁾」

こうして、スピーリトは、ジェンティーレーが不当に否定的に評価された戦後の時期に、クローチェに次のような問題を突きつけたのであった。クローチェ—ジェンティーレーと図式される両者の関係は、本当はジェンティーレークローチェの関係ではないのか。ジェンティーレーこそクローチェの思想形成に大きな影響を与えた師ではないのか。そして、彼はそれらを含めたジェンティーレー思想の再評価のために、ジェンティーレー財団に所蔵されているクローチェの 1013 通の手紙を書簡集として公刊することに同意するよう求めたのであった。

このような主張は、ジェンティーレーと激しい対立関係にあったクローチェにとって容認しうるものではなかった。彼の回答は、1959 年 3 月『クワデルニ・デッラ・クリティカ』(*Quaderni della Critica*) 誌に掲載された。すなわち、「我々の生死をかけた経過の外や上に、我々の本、私やジェンティーレーの本があり、それらはすべての人によって読まれ、検討される。それらから哲学的—歴史的判断が引き出されねばならない。なぜなら、それらのみが判断にとって真正で、直接的で、確実な資料であるからだ。⁽¹²⁾」「それゆえ、スピーリト教授は、外発的影響という空虚な年代記で何を意図しようとしているのか。影響が内発的とされるとき、影響ではなく、それを受け入れ、それ自身の行為の中でそれを變形させ、そして、予期せぬ真理に到達するか、あるいは、異なり対立する道をとるための経験や忠告・ ・ ・として役立つ精神の活動である。すなわち、このことをスピーリ

ト教授は知り、理解し、それに合致した行動をとるべきである。しかし、彼はそれを知らず、そのように行動しない。⁽¹³⁾

このようにクローチェはスピリトの主張を厳しく批判したのであったが、前述のように両者の書簡集は発行され、我々は両者の知的交流の詳細を知ることができるのである。

- (1) U. Spirito, *op.sit.*, pp.76 – 77.
- (2) *Ibid.*, p.78.
- (3) チアルドは「(ヘーゲル主義の実証的批判という)仕事は、イタリアでは、クローチェによって1906年の『ヘーゲル哲学における生けるものと死せるもの』という本でなされた。行為的観念論が同じ問題に挑んだが、ヘーゲルにぶつかり、その中に囚われるという障害を乗り越えることができなかった。」と論じているが、これは、ジェンティーレ思想に対する明らかな誤解である。M.Ciardo, *ibido.*, p.vii.
- (4) U. Spirito, *op.sit.*, p. 79.
- (5) *Ibid.*, p.78.
- (6) *Ibid.*, p.88.
- (7) *Ibid.*, pp.89 – 90.
- (8) *Ibid.*, pp.87 – 88.
- (9) *Ibid.*
- (10) *Ibid.*, pp. 90 – 91.
- (11) *Ibid.*, p.92.
- (12) B.Croce, 《Quaderni della Critica》, n. 16, marzo 1950, pp. 97 – 100. ora in B. Croce, *Terze Pagine Sparse*, vol. II. Bari, 1955, pp. 86 – 91.
- (13) *Ibid.*

2. クローチェとジェンティーレの出会いと交流

クローチェとジェンティーレの交流が始まった1896年から、相互批評を通じて知的共同作業が行われた1912年頃までの期間の両者の出会いと交流について、論ずることとする。

クローチェは、資産家の父、パスクァーレと教養豊かな母、ルイーザ・シパーリの間に、1866年2月25日、母の生家のあるアブルッツォ州ラクイラ県の小山村、ペスカッセローリに生まれた。生後まもなく、家族の住むナポリに移

り、彼はその生涯の大半をナポリで過ごしたのであるが、高校を修了した1883年夏、家族とヴァカンスのためイスキア島のカーザミッチョラに滞在中、地震にあい、父母と妹を亡くした。そのため、弟のアルフォンソと共に、ローマにいる叔父で、右派の政治家シルヴィオ・スパヴェンタの家に引き取られ、その後3年間をローマで生活した。その間、ローマ大学で法学を専攻したが、法律には興味を持てなかった。クローチェを惹きつけた講義は、ヘルバルト倫理学を講じていたアントニオ・ラブリオーラの道徳哲学であった。ラブリオーラは、スパヴェンタ家のサロンに集う知識人や政治家達の一人であり、クローチェの学生時代の師として交流が始まった。

しかし、クローチェの興味と関心は博識学に向かい、1886年ナポリに帰って、地方史や文芸の研究に没頭した。彼は哲学への関心が芽生えたのは、彼が後に回想しているように、比較的遅く27歳頃のことであった。彼が直面した最初の哲学的問題は、「歴史は科学であるか、芸術であるか」という問題であった。1893年「芸術の一般概念に包摂された歴史」(*La storia ridotta sotto il concetto generale dell' arte.*)と題する論文を発表し、「歴史を科学である」とするパスクワーレ・ヴィッラーリの実証主義的歴史叙述に反対して「歴史は芸術である」と論じたが、これはによって彼は反実証主義の宣言者として一躍注目される存在となった⁽¹⁾。

他方、ジェンティーレは、シチリア州トラパニ県の町カステルヴェトラノーで、1875年5月29日、薬局を経営する同名の父ジョヴァンニと元小学校教員の母テレザ・クルティの間に、10人兄弟の第8子として生まれた。父ジョヴァンニは、その土地の比較的豊かな中産階級に属していたとはいえ、家族の数が多ことから、その生活はかならずしも楽なものではなかった。

カステルヴェトラノーで中学校を卒業後、彼は、1891年県都トラパニにあるエクシーメネス文科系高等学校(*liceo classico Ximenes*)に進学し、1893年までトラパニで学生生活を送った。高等学校での卒業試験を終えた後、彼は、パレルモで行われたピサ高等師範学校(*Scuola Normale Superiore di Pisa*)の選抜試験に合格し、1893年11月シチリアを後にして、高等師範

の文学部に入学した。この学校は、フランスの高等師範学校(École normale supérieure)を模して、ナポレオンによって設立され、当時イタリアのエリート養成機関の一つとされていた。

高等師範に入学後、ジェンティーレが親しくなった教授に、実証主義的な歴史叙述理論の代表者アレッサンドロ・ダンコーナと観念論哲学者のドナート・ヤーヤがいた。両者は、思想的に対蹠的立場にあった。ジェンティーレは、ヤーヤの研究に強い感銘を受け、後に彼の指導の下にイタリア南部の思想家ロズミーニとジョベルティに関する卒業論文を執筆することになった⁽²⁾。

ジェンティーレはヤーヤとダンコーナがともにクローチェと親交があることを知り、17世紀から18世紀にかけてのナポリ文化に関するクローチェの著作に親しんでいた。そこで、彼は、1896年6月、高等師範学校の『年報』《*Annali della R. Scuola Normale Superiore di Pisa, Filosofia e filologia*》にラスカの喜劇に関する論文⁽³⁾を執筆した時、その抜刷をクローチェに献呈した。クローチェからは、親しみを込めた礼状⁽⁴⁾と彼がすでに発表していた文学評論の小論文⁽⁵⁾が送られてきた。しかし、ジェンティーレは、すでにその論文をヤーヤに借りて読んでいたので、書店で入手できなかった1895年末に発表された論文、「文化史について」

(*Intorno alla storia della cultura (Kultur - geschichte)*)⁽⁶⁾を送ってくれるよう懇請した。クローチェは、その論文の抜刷がすでに無くなってしまったため、その代わりに「歴史理論に関する最近の論文」、すなわち、彼のマルクス主義に関する最初の論文である「史的唯物論について」(*Sulla concezione materialistica della storia*)⁽⁷⁾の抜刷をジェンティーレに送った。

ジェンティーレは、論文の「推論の鋭さと表現の明快さ」を高く評価し、クローチェの「取扱っている問題は、私の研究とは無関係ではなく、今後の哲学研究に役立つ」と、感謝の念を込めて礼状を送ったのであった⁽⁸⁾。こうして、クローチェとジェンティーレの交流が始まった。その後の文通の中で両者は、歴史理論と芸術哲学という共通の関心を持ち、ともに反実証主義の立場にあることに気付いた。

数ヵ月後、彼は、「社会芸術」(*Arte sociale*)

と題する小論文⁽⁹⁾をクローチェに送った。ジェンティーレは、この論文において観念論の立場から、芸術は形相であり、質料ではない。芸術的質料あるいは非芸術的質料というものはありえず、形相こそが芸術を芸術たらしめるものであると論じた。この主張は、クローチェの芸術に関する見解と一致するものであり、彼をおおい満足させるものであった。それゆえ、彼は、若いジェンティーレに思想的・理論的共通性を感じ、両者の知的交流はより親しみを込めたものとなった。その後、ジェンティーレの哲学への関心は、イタリアのそれだけではなく、ドイツ哲学にも向けられ、卒業論文の完成後、カントやヘーゲルのみならず、マルクスやエンゲルスの著作を読み始めた。

翌1897年、ジェンティーレはナポリに赴き、クローチェと初めて対面することになった。こうして、1896年の最初の手紙のやり取りと翌年ナポリでの初会談の後、ジェンティーレとクローチェの関係は、ますます友好的なものになった。書誌情報や抜刷と本の交換、進行中の仕事に関して、その都度打ち明け。他の共通の関心領域、マルクス主義、歴史の方法論の問題、美学に関して意気投合した。

当時、ジェンティーレはイタリアの哲学史の研究に没頭していたが、ナポリのヘーゲル派の代表的哲学者、ベルトランド・スパヴェンタの思想研究のために、その散逸した論文や手紙を収集し、著作集を刊行する必要性を感じていた。スパヴェンタは、ヤーヤの師であり、間接的に彼の師であった。また、スパヴェンタは、クローチェがローマで寄宿した叔父シルヴィオ・スパヴェンタの兄弟であり、クローチェにとって身近な人物であった。そこで、ジェンティーレは、スパヴェンタの甥であるクローチェに1898年3月3日付けの手紙で、彼の散逸した論文や手紙の収集し著作集を刊行するために、ナポリの出版社にその企画を提案することを依頼した⁽¹⁰⁾。クローチェはその企画に賛同し、3月8日「モラーノ社に出版を頼むことにする」と手短かに返答した⁽¹¹⁾。ベルトランド・スパヴェンタの著作集は、1900年にクローチェの費用負担によって、ナポリで出版された。

1898年10月、ジェンティーレは、アブルッツォ(Abruzzo)州⁽¹²⁾の小都市カンポバッソにあ

る王立マリオ・パガーノ高等学校に哲学教員の職を得て赴任した。カンポバッソでの奉職中、ジェンティーレの関心は、マルクスとスパヴェンタに関する研究と歴史の概念と芸術の本質の研究に向けられた。その成果は、『マルクスの哲学』(*La filosofia di Marx*, 1899)と『ヘーゲル弁証法の改造』(*La riforma della dialettica hegeliana*, 1913)となって世に現れた。これらは、その後の理論体系の輪郭を描くものとなっており、彼の観念論構築の骨組みとなっている。しかし、カンポバッソではその研究のための文献に事欠き、彼はヤーヤとクローチェからの文献や情報の援助に頼らざるを得なかった。そこで、彼は早い機会に研究条件の整った場所に移ることを望んだ。

1900年、彼はナポリにあるヴィットリオ・エマヌエル高等学校 (*liceo Vittorio Emanuele*) の補修学級の講座を担当することになり、ナポリに転居した。こうして、彼はクローチェの傍で彼と共同作業を行う機会を得た。両者の友情は知的協力に変わり、クローチェは、18世紀と19世紀のナポリ哲学史に関するジェンティーレの著書の出版費用を全額引き受けたのであった。1903年は彼らにとって、新たな共同作業の出発点となった。隔月刊の哲学・文芸批評雑誌『ラ・クリティカ』(*La Critica*) が創刊され、その後約20年間にわたってイタリアの思想・文芸界をリードした新しいイタリア文化の中心となる文化工房が誕生したのである。『ラ・クリティカ』誌においては、共同編集者・執筆者としてクローチェが主として文芸分野を、ジェンティーレが哲学分野を担当した。

こうして彼らの知的協力関係は深まっていたが、両者の社会・経済状態や性格・気質はまったく異なっていた。クローチェは、周知のように裕福な家庭に育ち資産に恵まれて、一生涯大学等に職を求めることなく在野の研究者として知的探求に励んだ。他方、ジェンティーレは時に経済的に困窮し、クローチェの援助を仰ぐこともしばしばであった。また、クローチェが学界を評価せず、辛らつな言葉でその職業的駆け引きを批判したのに対して、ジェンティーレはその世界に職を求め続け、より有利なポストを得ることに腐心し続けた。研究や批評において、クローチェは緻密で優雅であったが、ジェ

ンティーレは厳格で辛らつであった。しかし、この時期、そのような違いは彼らの関係を害するものではなかった。ジェンティーレは、1903年に創刊された『ラ・クリティカ』誌から1905年に刊行された『近代哲学古典集』(*Classici della filosofia moderna*) という叢書シリーズまで、クローチェのすべての企画に参加し、哲学研究を深めながら、この時期、彼とともに文化の戦闘者・改革者となったのである。

ジェンティーレがその哲学体系の構想を大筋において明らかにする機会は、ナポリ大学での哲学講義によって与えられた。その開講講演は「観念論の再生」(*La rinascita dell'idealismo*) という題目で、1903年2月28日に行われた。この講演において、彼は精神と自然の関係とその統一について論じたが、この「観念論の再生」こそ、彼の観念論の宣言であった。ここでは、いまだ「行為」(*atto*) という言葉は用いられていないが、精神と自然の統一は、数年後に彼の観念論の基本的な特質となる思想と行動の統一に先立つものと考えられる⁽¹³⁾。

1906年、彼はパレルモ大学に哲学史の講座を担当する職を得て、ナポリを後にしてシチリアに帰ることになった。クローチェと離れたことは、彼の研究や『ラ・クリティカ』誌への執筆に不利な状況もたらすかのように思われたが、雑誌への原稿は郵送により支障なく行われ、他方で、ナポリではクローチェとの日々の親しさの中では難しかった彼の思想の明確化に役立つという効果をもたらした。

その最初のもは、美学の問題に関わる問題であった。『ラ・クリティカ』誌上で、彼は、創作中の芸術家と思考中の哲学者には実質的に違いは無い。創作と判断は同一の精神の活動であると主張した。これは、クローチェとは異なる主張であった⁽¹⁴⁾。クローチェとの不一致は、手紙での議論でも現れた。それは、哲学と哲学史の関係についての議論においてであった⁽¹⁵⁾。彼にとって、哲学と哲学史という二つの語は同義語であり、哲学(一つの体系)と哲学史(一連の過去の体系)の区別は純粹に経験的なものである。哲学的に思考するためには、過去の哲学を一定の歴史的順序に従って並べ、再構築しなければならない。これは、彼が数年来練り上げつつあった概念であったが、それまで明確に

表現していなかった。こうして、あらゆる哲学史は、したがってすべての過去は、哲学者が自己の思想を実現する行為に帰せられた。他者の思想を理解することと自己の思想を思惟することの間の区別を取り除かれた。

クローチェとジェンティーレの相違は、ヘーゲル弁証法、とくに区分の関係や対立物の統一の関係に関わっており、これまでの両者の合意を覆すことになる。ジェンティーレが、区分をその同一行為の内部に帰着させようとし、逆に、クローチェは、芸術と芸術判断、哲学と哲学史、経済と倫理の区分の必要性を執拗に強調した。彼らは、イタリアの最も挑発的な雑誌の編集者として、イタリア文化を改革するという野心的な意図を推し進める哲学的連帯の主役であった。彼らの不一致が拡大すると、その意図は不成功に終わることになったであろう。それを避けるためには、一致を見出すことが必要であった。したがって、クローチェは、もしジェンティーレが「彼の議論を講演のような口頭、あるいは断片的メモの形式でなく、論理学や美学として体系的な論述で展開しようとするなら」、自らの立場を見直さねばならないと書き送った⁽¹⁶⁾。

ジェンティーレは、クローチェの忠告と強い要請によって、その考えを修正することを受け入れた。しかし、修正は差異を埋めるには不十分であった。なぜなら、この問題は、彼のパレルモ大学での講義のテーマであったからである。彼は忠告を受け入れ、「そのうち私の思想が成熟して、変わることを期待する」と返信して⁽¹⁷⁾、開講講演の草稿をお蔵入りさせた。しかし、彼は、それをほんの一寸だけお蔵入りさせたのであった。翌1908年、それを『哲学雑誌』《*Rivista filosofica*》に発表した。さらに、1911年には、彼の思想体系の中心となる『純粹行為としての思惟行為』《*L'atto del pensare come atto puro.*》が出版された。こうして、その後両者の関係に破綻もたらすことになる不一致が顕現し始めたのであった。

(1) クローチェの生涯については、F. Nicolini, *BENEDETTO CROCE*, Torino, 1962. を参照。なお、クローチェとジェンティーレの関係については、J. Jacobelli, *Croce Gentile, Dal sodalizio al drama*, Milano, 1989. を参考にした。

- (2) ジェンティーレの経歴については、次のものを参照。G. Turi, *Giovanni Gentile. Una biografia*. Torino, 2006. S. Romano, *Giovanni Gentile. La filosofia al potere*, Milano, 1984. M. di Lalla, *Vita di Giovanni Gentile*, Firenze, 1975. R. A. Suppini, *Giovanni Gentile. Ideologo del fascismo*, Cremona, 1976.
- (3) Delle commedie di Anton Francesco Grazzini detto il Lasca, in 《*Annali della R. Scuola Normale Superiore di Pisa, Filosofia e filologia*》, vol. XII (della serie vol. XIX), Pisa, Tip. Nistri, 1897 (in estr. 1896), pp.1 – 30.
- (4) *Lettere a Croce*, I, pp.9 – 11.
- (5) *libercolo critico. La critica letteraria, questioni teoriche*, Loescher, Roma, 1894; 2^a ed., riveduta e aumentata, 1896; rist. in *Primi saggi*, Bari, Laterza, 1951, 3^a ed., pp.73 – 165.
- (6) *Intorno alla storia della cultura (Kulturgeschichte)* in 《*Atti dell' Accademia Pontaniana*》 vol. XXV, 1895.
- (7) B. Croce, *Sulla concezione materialistica della storia, osservazioni*, in 《*Atti dell' Accademia Pontaniana*》 vol. XXVI, 1896; rist. ora in *Materialismo storico ed economia marxistica*, 10^a ed., Bari, 1961. pp. 1 – 22. 以下、MSと略記する。
- (8) *Lettere a Croce*, I, p.12.
- (9) G. Gentile, *Arte sociale*, in 《*Helios*》, a.II, 1896, n.3, pp.17-21. ora cf. G. 13, C.2.))
- (10) *Lettere a Croce*, I, pp.78 – 9.
- (11) *Lettere a Gentile*, pp.17 – 8.
- (12) カンポバッソは、現在モリーゼ州の州都であるが、モリーゼ州は1963年に北隣のアブルッツォ州から分離独立した。ジェンティーレが赴任した当時は、アブルッツォ州に属する町であった。
- (13) S. Romano, *op. cit.*, p.126.
- (14) 詳細は、cf. S. Romano, *ibid.*, 143.
- (15) *Lettere a Croce*, II, p. 332.
- (16) *Lettere a Gentile*, pp.17 – 8.
- (17) *Lettere a Croce*, III, p. 25. 両者の不一致は、彼らの人間関係に害を及ぼすものではなかった。ジェンティーレは、傲慢で好戦的であったが、クローチェの魅力、知性、寛容さに尊敬の念を抱いていた。ジェンティーレは、この頃、クローチェに2人称の《voi》でなく、より個人的親密さを示

す《tu》で用いることを求め、クローチェもまたそれを受け入れたのであった。Cf. *Ibid.*, pp.32 – 33. *Lettere a Gentile*, p.235.

3. マルクス主義に関する対話

前節で、クローチェとジェンティーレの知的交流について概観したが、両者の初期の交流において、最大のテーマとなったのはマルクス主義に関する相互批評であった。そこで、本節ではこの点をとくに取上げて考察することにした。

クローチェがイタリアにおける思想家の一人として最初の名声を得たのは、実にマルクス主義の研究によってであった。19世紀後半に、ヨーロッパ各国に広まったマルクス主義は、改良主義に関して、その陣営内で危機ともいわれた深刻な論争を引き起こしていた。とりわけ、ドイツ社会民主党において右派のベルンシュタインによって口火が切られた修正主義論争はヨーロッパ各国に波及し、修正派と正統派による論争が繰り広げられることになった。イタリアにおいても、社会党内部で革命主義を堅持する最大限綱領派と改良主義を主張する最小限綱領派による政治闘争が繰り広げられたが、マルクス主義に関する理論的論争は別の形で展開された。すなわち、ラブリオーラ、クローチェ、ジェンティーレ、ソレルの参加による論争となったのであった。この論争において特徴的なことは、第一に、非マルクス主義者が論争の当事者となって参加したことである。当時マルクス主義者となっていたラブリオーラに対して、クローチェとジェンティーレはともにマルクス主義とは無縁であったし、フランスにあって論争に介入したソレルはマルクス主義に接近した時期があったとはいえ、この時期には既に革命的サンディカリズムに傾斜しつつあった。第二に、これらの論争者たちのいずれもが、政治的实践とはほぼ無縁の理論家であり、現実の社会主義運動から問題意識を獲得したのではなく、理論的な関心が論争への関与を促したという側面が強いことである。したがって、論争は、政治的实践とは切り離された地平で、著しく抽象的な理論の論争として展開され、マルクス主義の修正を争うものとはならなかった。さらに、ラブリオ

ーラ、クローチェ、ジェンティーレらに、ヘーゲルの陶冶があったことから、論争は哲学的色彩を帯びることになったのであった⁽¹⁾。

ただし、この論争者をラブリオーラ対クローチェ、ジェンティーレ、ソレルの図式で対置させることが、その大枠において妥当であるにせよ、クローチェ、ジェンティーレおよびソレルが一致した主張を展開したわけではなく、当然のことながら彼らの間には多くの相違があった。しかし、本稿の主題からして、ここで取扱うのはこの論争自体ではなく、クローチェとジェンティーレの知的交流における相互的影響についてである。

1895年4月27日、クローチェは、ラブリオーラから一通の手紙を受取り、パリで創刊された雑誌『ドヴェニール・ソシアル』《*Devenir Social*》の購読者になって欲しいこと、そして、この雑誌に掲載予定の「共産党宣言を記念して」

(*In memoria del Manifesto dei Comunisti*)と題する草稿に目を通すことを依頼された⁽²⁾。彼は、ラブリオーラが数年前からローマ大学でマルクス主義の講義を始めていたことを仄聞してはいたが、ナポリに居を移していたので聴講することができなかったため、大なる関心を持って熟読した。この論文の中で、ラブリオーラは、共産党宣言の成立の事情を叙述しながら、ブルジョワ社会に代わる歴史的時代としての共産主義の必然性を証明しようとし、歴史哲学、経済学批判、革命戦略としての新しい理論に含まれる問題全体を概説していた。ラブリオーラは、史的唯物論を「事実の必然性を解明しようとする客観的な歴史哲学」であり、「最新かつ最終的な歴史哲学」と明言したのである⁽³⁾。

草稿を読み進めるうちに、彼は、社会主義への興味を掻き立てられ、この論文が彼にとって新しい「展望」や「概念」に満ちていると感じたのである。そして、「熱望した精神に対して開かれた啓示の感情」⁽⁴⁾に導かれて、マルクス主義の研究を開始したのであった。そして、クローチェはラブリオーラの友人、その著作の編集者・発行者として、イタリアやフランスの社会主義系雑誌の寄稿者として、この時期、有名なマルクス主義研究者となったのであった。1896年から1897年にかけての彼のマルクス主義研究は、この時期の知的探求に新しい観点をもた

らし、歴史的博識と文芸の分野に集中していた視野をより広い歴史研究の領域に押し広げることになった。マルクス主義研究は、クローチェの哲学体系を確立するための通過点となったのである。

ラブリオーラとクローチェの潜在的対立点は、史的唯物論が歴史哲学であるか否かという問題にあった。前述のように、ジェンティーレは、クローチェから彼のマルクス主義に関する最初の論文「史的唯物論について」を与えられていたが、1897年1月、クローチェが『ドヴェニール・ソシアル』誌に発表したばかりのマルクス主義に関する仏語の論文（*Les théories historiques de M. Loria.*）を受け取った⁽⁵⁾。クローチェは、君が史的唯物論に関する疑問や見解を知らせてくれれば大変うれしいと、この論文への評価を求めたのであった。そこで、ジェンティーレは、97年1月13日付けの手紙の中で、「史的唯物論の価値について、あなたとラブリオーラの間にあると気付く相違、すなわち、あなたは認識していないが、私には非常に重要だと思われる相違」を指摘した⁽⁶⁾。彼は、さらに数日後の17日付の手紙で、再びこの問題を詳しくクローチェに書き送っている⁽⁷⁾。彼がここで問題としたのは、ラブリオーラが主張するように、史的唯物論は歴史哲学であるか否か、そして、社会主義の科学的基礎を成すものか否か、ということであった。彼は、史的唯物論の価値に関するクローチェとラブリオーラの考えの中に対立するものがあることに気付いた。とりわけ、両者の対立点は、史的唯物論が歴史哲学であるか否かという問題にあったのである。

クローチェには、史的唯物論が歴史哲学でないことは明らかなように思われた⁽⁸⁾。彼によれば、歴史過程は個別の諸事実によって構成されており、「この歴史的諸事実は概念に纏め上げることはできない」がゆえに、歴史哲学は不可能である。歴史哲学は不可能であるということによって、史的唯物論は歴史哲学ではないとするならば、それは一体何であろうか。史的唯物論にその意義を認めるために、彼の研究は、その視点を歴史から歴史叙述に移し、よき歴史叙述活動の規準を求めることになった。しかし、彼には、マルクス主義は単なる一つの方法論ではなく、「歴史家の意識の中に入ってくる新しい事

実や経験の総体」すなわち「新しい資料の総体」であり、歴史叙述に関しては、「歴史を理解する新しい援助資料として、それによってなされた観察を考慮するようという警告」⁽⁹⁾であった。こうして、彼は、ラブリオーラが歴史哲学とした史的唯物論を、「ラブリオーラの表現」ではと注意深く留保を付しながら、歴史の理論あるいは歴史哲学ではない、と結論付けたのであった。

クローチェの結論は、ラブリオーラの主張とは明らかに異なるものであったにもかかわらず、彼は、「ラブリオーラとの相違は本質的なものではありえない」と論じた⁽¹⁰⁾。しかし、ジェンティーレには「相違は非常に明確で、本質的なものであるように・・・」思われた。「2つの問題が密接に関連しており」、究極的には、「史的唯物論は歴史哲学であるか」、そして、「この理論と社会主義の間に介在する関係は必然的なものか」という「一つの問題になっている。」「歴史哲学が未来の事実の経過を予見させ、史的唯物論が共産主義の理論に他ならないとすれば、この二つの問題は史的唯物論が歴史哲学といいのか否かという問題に帰結するように思われる。⁽¹¹⁾」この点で、クローチェの考えは史的唯物論に哲学的基礎を認めず、哲学的価値を否定しようとしていたため、マルクス主義の科学性を評価し、歴史哲学であると主張するラブリオーラから次第に離れていくことになる。ジェンティーレは、そのことにすぐさま気づき、両者の対話が始まったのである。

ジェンティーレは、まず、クローチェの考えに理解を示した。「ラブリオーラによれば、マルクスの独創性と価値、そして史的唯物論の真髄は、歴史の必然的な流れを明らかにしたところにある。⁽¹²⁾」ラブリオーラは、一連の社会的出来事に意味や価値があるとする。しかし、唯物論者が歴史の中に見出したとする意味や価値という客観的真理は、単に彼らの願望や意向の入れ込みに過ぎない。「歴史、社会、事物には、意味も、法則もない。法則は、常に精神の規定したものであり、いわば、主観の丹精込めた製造物である。客観性は必然的かつ普遍的な認識にまで高められた確かさに専ら帰せられる。史的唯物論が、事物の中にあり、その現実の生成という事実を見、伝えることに限られると言われる時、それは比喩的に表現されているに過ぎな

い。事物は我々が動き動こうとすることの中では、その事物に関する我々の概念に他ならない・・・⁽¹³⁾」このように、彼はその観念論的信念を明確に表現して返信した。

ジェンティーレの議論の厳密さおよび推論の確かさは、クローチェに好印象を与え、彼はただ同意するのみであった。「君は史的唯物論の問題を完全に会得し自己のものにしており、ラブリオーラの本を消化吸収し、明快で正確なすばらしい表現力で反論を著している。⁽¹⁴⁾」クローチェは、ジェンティーレの議論の基本的な要素を実質的に認めて、近代史は社会主義的信条に、「自由主義的、絶対主義的、神政政治的等々」の他の信条に提供したよりも多く議論を提供したと、述べるにとどまった。彼は、ジェンティーレの哲学的議論の前に鎧を脱がざるをえなかったのであった⁽¹⁵⁾。クローチェは、速やかな彼との合意を目指して、次のように返信した。「君の手紙から、私たちはお互いに理解しあっていることが分かった。史的唯物論の理論的価値について、私たちは一致している。問題は社会主義とそれとの関係についてだ。歴史哲学から生じる必然的關係、ここでも、私たちは一致している。⁽¹⁶⁾」

さらに、両者は互いに意図的に一致を目指した。1897年10月26日付けの手紙で、ジェンティーレの「史的唯物論批判」⁽¹⁷⁾に関して、クローチェは、「私は結論では君と一致している。・・・(私にとって、第一に、史的唯物論は・・・単なる方法的見解でなければならない。)・・・私たちの不一致は、理論的問題にではなく、史的唯物論の著者たちの書物の解釈にある。私の解釈は言葉の叙述にあまり留意していない。君の解釈は非常に厳密に言葉に注意を払っている。おそらく、ここでも私は間違っているだろう。しかし、もっと間違っているのは、彼らの思想を十分に吟味せず、不十分で矛盾した形のままにしているマルクスやエンゲルスのような著者であり、そして我がラブリオーラもそうである。⁽¹⁸⁾」これに対して、ジェンティーレは「あなたが、結論では私たちが一致していると言うのはまったく正しい。・・・私が書いてきたような問題について、史的唯物論に帰すべき価値に関して、私たち二人は完全に一致している。あなたが、史的唯物論をある場合には役に立ち、

ある場合にはそうでないという歴史解釈の一つの規準でしかありえないと言うのは、そのとおりです。しかし、なお少し議論すべきことが残っているのではないかと思います・・・⁽¹⁹⁾」と述べたのであった。

その後も、やり取りが続いた後、1898年11月、クローチェは、ジェンティーレに「史的唯物論に関しては、私はもはやそれに首を突っ込みたくないことを君に告げておく。・・・来年、マルクス主義に関する私のさまざまな著作を、マルクス経済学の困難な問題点についての二つの論文をそれに付け加えて、一つに集めようと思っている。すべてを改訂し、序文を付して、一冊の本に、一つの棺おけの中に、・・・のように、編集するつもりだ。・・・マルクス主義から、私は私に必要なことを引き出した。⁽²⁰⁾」と書き送った。

しかし、ジェンティーレは議論を放棄しなかった。カンポバッソに移ってから、ジェンティーレは、マルクス主義の関する第二の論文「実践の哲学」(*La filosofia della prassi*)を1899年1月から2月にかけての数週間の間に書き終えた。そして、第一の論文と一緒にして『マルクスの哲学』(*La filosofia di Marx*)と題した本にして出版するために、それをすぐにピサのスポエッリ出版社に持ち込んだ。マルクスが哲学を持っていたか否か、という問いに、ジェンティーレは、肯定的な答えをしたが、しかし、その哲学(史的唯物論)は、政治的テーゼの後にそれに正当性や必然性を付与するために考え出された、と付け加えた。マルクスの哲学は妥当で一貫しているかという第二の問いに、彼は否と答えた⁽²¹⁾。

ジェンティーレは、マルクスはヘーゲルの精神を物質と取り替えたを見た。観念論者は、現実には精神がその中に内在する概念や合理的法則によって支配されている、あるいは、現実には精神の表示である、と主張して問題を解決する。唯物論者は、世界の精神性を認めることができないで、あたかも感覚の外に存在する現実があるかのように推論せざるをえない。「それは次のことを意味する。歴史、その本質は弁証法的に必然的な発展によって規定されている歴史は、その発展が止まり、あるいは、道を変えるという事実のために、突然非現実的になる。どのよ

うにして？なぜ？哲学者たちの思考によって！史的唯物論以外のもの！・・・なぜなら、哲学者たちは世界を変えるために自由にできるのは、哲学以外の手段を持たないからである。⁽²²⁾したがって、ジェンティーレによれば、マルクスの哲学の中には、癒しがたい矛盾、むしろ、対立した要素の折衷主義がある。

マルクス主義を巡る両者の対話は、それぞれに大きな成果を与えた。二人の哲学者は、マルクス主義が含有する有用なものをそこから引き出し、クローチェは美学の、ジェンティーレは観念論の考察に役立たせるという成果を得たのである。クローチェは、史的唯物論に対する彼の思考を深めるために、ジェンティーレの議論を役立たせた。他方、ジェンティーレは、クローチェとの手紙での対話からえた哲学的考察を、資格試験論文として書いた「史的唯物論批判」(Una critica del materialismo storico.)と題する論文のために参考にした。両者の違いに関して言及すれば、哲学者というより歴史家であったクローチェは、事実やそれをよりよく評価するに役立つことに敏感であった。逆に、既に哲学的素養を身に付けていたジェンティーレは、推論の綿密さにより注意を払っていた。クローチェにとって、歴史は、現実を非概念的形で再構成するものでなければならず、そこに芸術との類似性がある。なぜなら、概念的再構成は世界に関する形而上学的観念を前提にするからである。逆に、ジェンティーレにとっては、形而上学がなくては、哲学も歴史もありえないのであった⁽²³⁾。

(1) C. Vigna (a cura di), *Le origini del marxismo teorico in Italia*, Roma, 1977, pp.19 - 20.

(2) B. Croce, *Come nacque e come morì il marxismo teorico in Italia (1895 - 1900)*, ora in *MS.*, p.279. 以下、*Come nacque.*と略記する。この「イタリアにおいて理論的マルクス主義はいかにして生まれ、いかにして死滅したか、1895 - 1900年」という回顧録の中で、ラブリオーラからの手紙の日付をもって理論的マルクス主義の生誕の日であると記したのであった。そして、彼は、この期間マルクス主義の研究に専念し、それ以後はマルクス主義が彼の研究の主題となることはなかった。 *ibid.*, pp.111 - 112.

(3) A. Labriola, *In memoria del Manifesto dei Comunisti*, 1895, p.95, ora in *Saggi sul Materialismo storico*, a cura di V. Gerratana e A. Guerra, Roma, 1964, p.62.

(4) B. Croce, *Come nacque*, p.282.

(5) B. Croce, *Les theories historiques de M. Loria*, in *«Dovenir Social»*, a. II, 1896, n.II, pp.881 - 905. ora in *MS.* pp.21 - 55.

(6) *Lettere a Croce*, I, p.16.

(7) *Ibid.*, pp.17 - 28.

(8) B. Croce, *Sulla concezione materialistica della storia, osservazioni*, pp.6-9. ora in *MS.*, p.17.

(9) 「私はそれぞれ(マルクスとエンゲルス)の著書を何度も読み返した。彼らが真に史的唯物論を歴史哲学と解釈していたという確信を得ることはできなかった。むしろ、エンゲルスは、最終的には史的唯物論を単なる方法(metodo)と呼んだのだ!・・・実際、マルクスもエンゲルスも、歴史についての理論を作り上げたのではなかった。彼らの著書は、私たちに一つの傾向を示している。それ以外のものではない。」彼らの本は、将来を「科学的に」予見するというのではなく、単に傾向を示し研究者に解釈の方法を提供しようとしたのだ。 *Lettere a Gentile*, p.5.

(10) B. Croce, *Sulla concezione materialistica della storia, osservazioni*, pp.6-9. ora in *MS.*, p.17.

(11) *Lettere a Croce*, I, p.18.

(12) *Ibid.*, p.20.

(13) *Ibid.*, p.21.

(14) *Lettere a Gentile*, p.4.

(15) S. Romano, *op.sit.*, p.35. J. Jacobelli, *op.sit.*

(16) *Lettere a Gentile*, p.6.

(17) G. Gentile, *Una critica del materialismo storico*, in *«Studi storici»*, VI, 1897, ora in G. Gentile, *La Filosofia di Marx*, Firenze, 1959.)

カンポバッソで最初の数ヶ月取り扱ったテーマである「マルクスの哲学」に関する論文は、その分析の精密さ・成熟性のゆえ、読者に大きな驚きを与えた。そして、1897年ナポリでクローチェがジェンティーレに会った時、この論文を、ニッティの『リフォルマ』(*Riforma*)誌か、パリの『ドヴェニール・ソシアル』誌に掲載するよう骨折ることを約束した。しかし、その論文を、10月に読んだとき、すぐに、そのイントロネーションがこのマルクス主義的雑誌の編集者たちに受け入れられな

いと考えた。彼は、ジェンティーレがマルクス主義の修正に関するヨーロッパの大論争に内部から参加しうるには、・・・史的唯物論の歴史的道德的問題に余りにも異質で敵対的であったと考えたのであった。

その後、ジェンティーレはナポリからローマへ行き、ラブリオーラを訪問した。当時、彼は病気があったが、会見は彼にとって楽しく有意義なものであった。話題は、ラブリオーラの新しい論文、「社会主義と哲学について」《*Discorrendo di socialismo e di filosofia*》にもが及んだ。ラブリオーラは、ジェンティーレの論文を読んで、クローチェへの手紙の中で「この抜刷は大変な厳密さと確実さで書かれている。いくつかの評価しうる観察を含んでいる」と賞賛したのであった。A.

Labriola, *Lettere a Benedetto Croce, 1885 - 1904*, Napoli, 1975, p.230. また、11月17日にジェンティーレにも同様な手紙を書き送っている。

(18) *Lettere a Gentile*, p.11.

(19) *Lettere a Croce*, I, p.50 - 61.

(20) *Lettere a Gentile*, p.34.

(21) G. Gentile, *La filosofia di Marx*. p.148 - 160.

(22) *ibido.*, p.163.

(23) J. Jacobelli, *op.sit.*, p.25.

おわりに

これまで論じてきたように、クローチェとジェンティーレは、両者の交流が始まった1896年から1912年頃までの第一の時期に、知的・理論的交流によって理論活動を行い、相互批評を通じてそれぞれの哲学理論を完成させた。彼らの思想的共同作業は、その当初から意見の相違や理論的対立を書簡の交換や活発な討論によって乗り越えながらお互いの思想形成に繋がったのであった。イタリア理想主義の思想に関しては、相互批評・批判によって、それぞれの理論体系の修正を重ねることによって巨大な観念論の体系を構築したのであり、その意味で他方を欠いては彼らの理論は別の姿に変わっていたに相違ないと言うのは言い過ぎであろうか。その意味で、「精神哲学」と「行為主義」は、お互いに他方からの批判を糧として理論的發展をみたのであった。

このことを前提として、スピーリトの指摘し

た問題をどのように考えるべきであろうか。両者の交わした書簡と辿れば、研究のそれぞれの局面で、大きな影響を与え、また、受けたことが分かる。とりわけ、哲学者ジェンティーレが、歴史家クローチェに与えた哲学的な影響は大きなものであったように思われる。クローチェに哲学への関心が芽生えたのは、後に回想しているように、比較的遅く27歳頃のことであった。この当時のことを、彼は「文学、文献学そして哲学での研究の多様な試みを経て、単なる博識や逸話に満足できず、精神内の必要性から、無意識のうちに歴史の問題の研究に向かいつつあった」と記している⁽¹⁾。しかし、この回想には偽りがある。彼が行ったという哲学の研究はこの時期はごく僅かで、彼の哲学研究とりわけヘーゲル哲学の研究は、1896年以降、哲学的厳密さで問題に取り組む若いジェンティーレから受けた刺激によるものであった⁽²⁾。これは、マルクス主義の研究において、彼が何故哲学的な内容に立ち入った議論をすることなく、その仕事をジェンティーレの研究に委ねたかを説明するものである⁽³⁾。

とはいえ、ジェンティーレこそクローチェの師であるとするスピーリトの議論に、俄かに賛同することは困難であろう。なぜなら、両者の理論形成とその発展に、それぞれどの程度の影響があったのかを測定することは、この段階では不可能だからである。先のスピーリトの公開書簡は、彼が不当に低く取り扱われていると考えた恩師ジェンティーレの名誉回復の試みであったように思われる。ここでは、ジェンティーレがクローチェに、また、逆にクローチェがジェンティーレに与えた相互の影響が大きいことを認めながらも、その課題の取り組みは他日を期したいと思う。

(1) B. Croce, *Come nacque*. p.254.

(2) C. Vigna, *op.sit.*, p.36.

(3) *Ibido.*